

主婦をめぐる思想遺産

—戦後日本の主婦論争

妙木 忍

東京外国語大学アジア・アフリカ言語
文化研究所ジュニア・フェロー

梅棹忠夫論から半世紀

日本社会でどのように主婦が論じられてきたのかという歴史的経緯をふりかえるとき、梅棹忠夫の女性論（1959）を欠かすことはできない。ここでいう梅棹論とは、第1次主婦論争に含まれる「妻無用論」と「母という名の切り札」（1959）のことだ。

女性が結婚することがあたりまえとされ、結婚したら主婦になることが主流化するまっただなかに、梅棹は主婦役割に疑問を提示し、それを全面否定した。猛反発をまねいたことは想像に難くない。梅棹論が掲載された『婦人公論』の不買運動を起こそうとした人たちもいたという（三枝1991：4）。「妻無用論」について読者からは、「胸のすく爽快きわまる思い」から「腹が立って仕方がなかった」まで幅広い意見が届けられたのである（梅棹1959b、上野編1982a：208）。

みょうき しのみ

東京大学大学院人文社会系研究科社会文化研究専攻社会学専門分野博士課程修了。博士（社会学）。専攻は社会学、ジェンダー研究。2006年度北海道大学観光学高等研究センター・学術研究員、2009年度より現職。著書に、『女性同士の争いはなぜ起こるのか』（単著、青土社、2009年）、天野正子他編『新編 日本のフェミニズム3 性役割』（共著、岩波書店、2009年）、千田有紀編『上野千鶴子に挑む』（共著、勁草書房、2011年）などがある。

あれから約半世紀。梅棹論は、2011年の今日読み返してもなお強い賛否を引き起こす、「生きた」論である。その射程の広さは驚くべきことでもあるが、主婦について考えるときに女性の家庭役割が議論の核心にあると考えるなら、納得できることでもある。

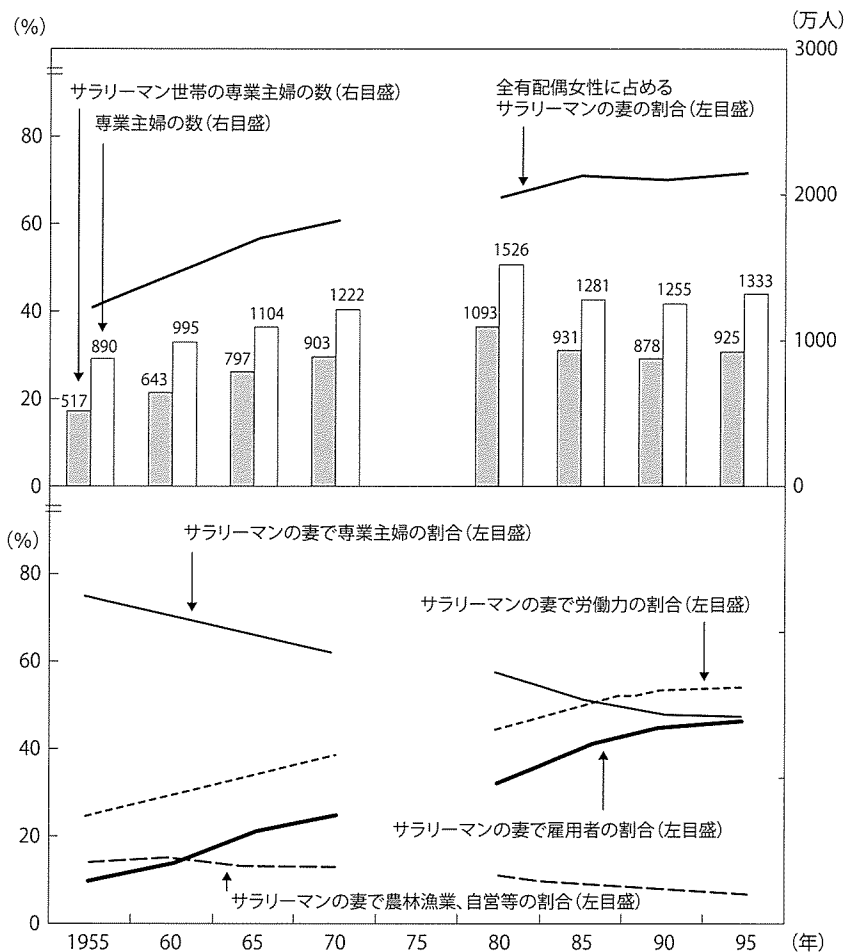
主婦をめぐる私たちがどこまで来たのだろうか。これを問うとき、女性の役割とされてきたもの（主婦役割、妻役割、母親役割といった性役割）に立ち戻ることになるだろう。主婦論争では性役割がテーマとなることが多く、とくに主婦役割や母親役割が論点となってきた。

主婦をめぐる歴史的転換点

戦後日本の社会史的变化をふりかえると、1950年代半ばから1970年代初頭にかけての高度成長期には、産業構造の転換、都市への人口流入、企業などに雇用されるサラリーマンの急増、日本的雇用慣行の普及・定着がみられ、また、この時期に、女子労働力率は低下した（経済企画庁編1997：11）。女性の主婦化という特徴を含む、構造が安定した時期を指して、社会学者の落合恵美子は「家族の戦後体制」と呼ぶ（落合[1994]1997：79）。

女子労働力率が1975年に46.1%と低い値を示したことや、有配偶女子の労働力人口比率が1983年に51.3%を記録した（専業主婦世帯が共働き世帯を下回った）ことは、主婦をめぐる歴史的転換点といえる¹。つまり、1970年代半ばまでは女性の主婦化が進行し、その後、1980年代以降は状況が変化し

図1 勤労者世帯の専業主婦の変遷



(備考) 1. 雇用者(非農林業)をサラリーマンとする。専業主婦は、全有配偶女性で非労働力の割合とする。なお、サラリーマンの妻で専業主婦は、夫が雇用者(非農林業)で妻が非労働力(無業)のものとした。
 2. 1955年から70年までは、総務省「国勢調査」により、80年以降は、総務庁「労働力調査特別調査」により作成。
 (出典) 経済企画庁編『国民生活白書(平成9年版)』(1997: 12)、「第1-1-6図 1970年代までサラリーマンの増加とともに増えた専業主婦」

てきたといえる。

だが、もう少し詳しくデータをみてみたい。図1は、『国民生活白書(平成9年版)』における「1970年代までサラリーマンの増加とともに増えた専業主婦」という図である。

図1上段によれば、サラリーマン世帯の専業主婦の数は1970年代を通じて増えている。だが図1下段をみると、「サラリーマンの妻で専業主婦の割合」は減少していること、一方「サラリーマンの妻で雇用者の割合」は増加していることがよみとれる。このことは、主婦でありながら労働者でもあるという、女性

の二重負担への視点をもたらさう。これは、上野千鶴子が「女性の主婦労働者化」(上野1982: 238)と呼んだ現象にも結びつく。戦後の主婦をめぐる論争はまさに、主婦であることと働くこととのあいだで生まれたのである。

女性たちの共通点

女性たちは、家庭と仕事のあいだで揺れ動くことを余儀なくされてきたという共通点を持っている。それは、時代ごとに社会史的背景が変化しても、程度の差はあれ、かたちを変えて今日にまで引き継がれている。

この共通点のもとでの女性たちの差異が、主婦論争の背景にはある。ここでいう女性たちの差異とは、女性たちのライフコース選択——たとえば「結婚するかしないか」「子どもを産むか産まないか」「仕事をするかしないか」「専業主婦になるかならないか」など——をめぐる差異である。

女性の生き方の選択をめぐる論争には、女性同士の比較が含まれているが、比較とは、ある共通点が存在し、そのもとでの差異がもたらすものである。共通点だけしかない場合や差異だけしかない場合には、比較は生まれにくい。主婦論争を考える上で、仕事と家庭のあいだでひきさかれてきた女性たちの共通点を、忘れるわけにはいかない。

このように考えると、主婦論争とは、論争の中身は女性同士の対立に見えるが、その実、女性同士の共通点が生み出した歴史的な産物である。女性たちがそれぞれの時代に、切実かつ必要なテーマで議論をたたかわせた軌跡は、1950年代から2000年代にいたるまで6次にわたって残されている。これは、日本における、主婦をめぐる思想遺産といってもよいだろう。では、日本社会でどのように主婦は論じられてきたのだろうか。

1970年代までの主婦論争

第1次主婦論争から第3次主婦論争については、上野千鶴子編『主婦論争を読む I / II 全記録』（1982、勁草書房）に資料と分析が収められている。

第1次主婦論争（1955-1959）は、主婦の職場進出の是非を問う論争であった。戦後復興と家電製品の普及がみられた時代だ。この論争では、主婦は主婦であることに加えて職業を持つべきだという論に対して、主婦役割を高く評価し主婦は職業を持つべきではないとする論が登場した。家庭の主婦と働く主婦の連帯を求める調停論もみられた。そこに、主婦役割を全面否定した梅棹論が登場したのだ。ほかの論が主婦役割の遂行をあたりまえのものとして議論すらしなかったのに対し、梅棹論は、主婦役割そのものを考察対象とし、それに疑問を呈した。主婦

が大衆化するさなかの出来事だった。梅棹論は歴史的に早すぎる指摘で、孤立し、追隨者は出ず、研究者も解釈に窮した痕跡がみられる。

第2次主婦論争（1960-1961）は、家事労働はなぜ経済的価値を生まないのかという問いにもとづく日本型家事労働論争である。高度成長と女性の主婦労働者化の進行が背景にある。家事労働の位置づけを問い、磯野富士子は経済学者らと議論をたたかわせた。この第2次主婦論争は、世界的にみても家事労働の問題化として早期かつ高水準とされる。

第3次主婦論争（1972）は、主婦の立場の正統性をめぐる論争である。武田京子の「主婦こそ解放された人間像」とそれをめぐる議論だ。そこには、女性の「主婦労働者化」がますます進行したという背景があった。上野はこの論争を、「主婦労働者化が大量現象となりつつあった時代の、「専業主婦」のアイデンティティ模索の作業」と解釈する（上野1982: 239-240）。

以上の3次にわたる主婦論争は、論争の対象が既婚女性であった。なるほど、生涯未婚率が低かったこれらの時代には、女性は結婚することがあたりまえとされ、結婚したら主婦役割を担うことが前提とされる論考が——梅棹論などわずかな例外を除いて——多かったのである³。主婦論争の軌跡は、当該時代の背景を反映しているかのようだ。

1980年代以降の主婦論争

だが1980年代以降の主婦論争においては、変化がみられる。1980年代後半には、働く母親の増加を背景として、仕事と育児の両立問題が浮上し、子連れ出勤論争が起きる。アグネス論争（1987-1988）のことだ。

1990年代後半には、専業主婦のリスク化と専業主婦の階層分解という背景のもとで、専業主婦論争（1998-2002）が起きる。ここでは、主婦役割全面肯定論と主婦役割全面否定論の対立が起きる。主婦役割を全面否定したのは石原里紗であり、石原論は梅棹論ときわめて類似している。梅棹論から約40年

を経て、類似した論が登場したのである。

2000年代に入ると、女性間の経済階層格差が広がるなかで、「負け犬」論争(2003-2005)が起きる。エッセイストの酒井順子が負け犬を「未婚・子ナシ、三十代以上の女性」(酒井2003: 8)と定義したことから始まった。婚姻上の地位(未婚・既婚)だけではなく、そこに経済階層格差を組み込んで、メディアが女性の対立軸をつくりあげた。

以上の論争を、第4次・第5次・第6次の主婦論争と名付けよう(妙木2009)。戦後半世紀にわたる論争を主婦論争という枠組みで通時的にみみると、比較の対象が変化してきたことがわかる。第4次以降の主婦論争は——第1次から第3次の主婦論争とは異なり——未婚女性が論争の舞台に含まれてきた。第6次主婦論争では未婚女性が主役だった。

また、第1次から第5次主婦論争までは性役割が議論の前提または対象となっていたが、第6次主婦論争においては性役割は議論の対象ではなくなり、「結婚しているかどうか」「出産しているかどうか」というライフイベントそのものが争点に浮上したこともわかる。第5次主婦論争まで引き継がれていた論点は欠落した。結婚や出産自体が論点となるということは、結婚や出産をすることがあたりまえとされた時代の終焉をも物語る。

主婦をめぐる二つの過渡期に

梅棹論と石原論という主婦役割全面否定論が、主婦の大衆化への過渡期と主婦の衰退への過渡期に登場したことは、歴史の偶然か必然か。この二つの論にはさまれた時代の論争は、すべて性役割を議論の前提または対象としている。この期間を、主婦の「役割」が論点となりえた時代と考えるなら、梅棹論から石原論までを一つのまとまりのある時代とみなすこともできる。もしこの立場に立つなら、第6次主婦論争において、性役割が論点から脱落した意味も理解できることになる。この「符合」について、「日本における近代家族の大衆的な成立期と終焉期にあたって」と上野は解釈する(上野2011: 160-161)。

戦後の日本において、女性は変化を2度経験した。それは、第3次主婦論争と第4次主婦論争のあいだ(1970年代半ば)と、第5次主婦論争と第6次主婦論争のあいだ(2000年代初頭)である。これらはそれぞれ、主婦になることが選択肢の一つに過ぎなくなった時代と、結婚することが選択肢の一つに過ぎなくなった時代ととらえることもできる。結婚の位置づけさえも変わってきた。もし主婦論争を主婦の「役割」をめぐる論争と考えるなら、第6次主婦論争の直前で主婦論争は終焉したと、いえるかもしれない。

問題の不可視化

第5次主婦論争まで論じられた性役割が、第6次主婦論争で論点から脱落したことは注目されてよい。論点から脱落したことは、性役割をめぐる問題の解決を意味するわけではない。性役割が議論されなくなったのはなぜだろうか。

結婚することがあたりまえとされなくなった時代に、結婚後のことが論点となることはないという解釈も可能だが、社会学者の加藤秀一は、「女たちはもはや結婚や男たちに何も期待しなくなった」と述べる(加藤2009)。加藤は、国際的にみても日本の既婚男性の家事時間が少ないことを指摘し、結婚したら性役割から逃れられないことを悟った女性たちは、少子化・非婚化という行動でそれを拒絶することにしたのだと解釈する(加藤2010: 100)。これは、女性たちの無言の抵抗というべきだろうか。

性役割の論点は、女性にもつばら配当されてきた家事労働と結びつく。主婦論争で性役割の論点が抜け落ちたことは、家事労働の問題が置き去りにされていることを意味する。問題は不可視化された(または見えにくくなった)だけで、解決はしていない。

核心にある性役割

日本社会でどのように主婦が論じられてきたのかをふりかえるとき、その核心には性役割がある。2000年代における、性役割の論点からの脱落もまた、考察すべき意味がある。それゆえにこそ、梅棹が

1959年という早期に女性の性役割を問うたことは、主婦論争の歴史のなかでも、核心的であった。彼は、男性が仕事で女性が家庭というあり方そのものが歴史的につくられたものであることを見据えていた。その男女の差は、ある時代に強まり、ある時代に弱まるであろうことも予想していた⁴。

統計をみれば、日本の男性と女性の性別役割分担意識は変化しつつあるが、家事をめぐる実態はまだ変化にとぼしい。男性と女性の、仕事と家庭におけるあり方にはなお非対称性が残る。

2011年に国立民族学博物館で開催された追悼の特別展「ウメサオタダオ展」に展示されていた読者からの手紙とその反響の大きさは、かつての話とはいえない⁵。性役割は今日でも主婦を考える上で根幹にあり続けているように思われる。梅棹論を含め、女性の生き方を模索した6次にわたる主婦論争には、相互に助けあう社会への手かかりと希望とが、息づいている。というのも、主婦論争のなかには、男性の長時間労働の指摘も、主婦であることから生まれる悩みも、女性の二重負担への疑問も、含まれているからである。■

《注》

- 1 統計は順に、総理府編（1996: 70）、総務庁統計局編（1989: 97）による。
- 2 主婦論争は、もともとサラリーマン世帯の無業の妻を対象とした論争であるため、雇用者世帯のデータにも注目する。
- 3 女性の生涯未婚率（50歳時点で一度も結婚したことのない人の割合）は、1955年、1960年、1965年、1970年にそれぞれ、1.48、1.89、2.54、3.39であり、低い数字であった。内閣府編（2001: 36）参照。
- 4 梅棹は、「結婚という制度は、なかなか消え去るまい」としながらも、「今後の結婚生活というもの、社会的に同質化した男と女との共同生活、というようなところに、しだいに接近してゆくのではないだろうか」と予想した（梅棹1959a、上野編1982a: 205-206）。この予想は、一部あたったが、家事をめぐるのは、どうだろうか。
- 5 特別展は、2011年3月10日から6月14日まで開催。特別展「ウメサオタダオ展」実行委員会編（2011）参照。

《参考文献》

- 磯野富士子、1960、「婦人解放論の混迷」『朝日ジャーナル』1960年4月10日号（再録：上野千鶴子編、1982b、『主婦論争を読むII全記録』勁草書房、2-22）
- 加藤秀一、2009、「「主婦論争」軸に性役割を考える」『日本経済新聞』2009年11月29日朝刊、23面
- 加藤秀一、2010、「コラム ジェンダー論の練習問題 第57回「女性同士の争い」の彼方」『解放教育』507号、98-100
- 経済企画庁編、1997、『国民生活白書（平成9年版）』大蔵省印刷局
- 妙木忍、2009、『女性同士の争いはなぜ起こるのか 主婦論争の誕生と終焉』青土社
- 内閣府編、2001、『男女共同参画白書（平成13年度版）』財務省印刷局
- 落合恵美子、[1994] 1997、『21世紀家族へ（新版）』有斐閣
- 三枝佐枝子、1991、「「妻無用論」のころ」、『梅棹忠夫著作集 月報9』中央公論社、3-5
- 酒井順子、2003、『負け犬の遠吠え』講談社
- 総務庁統計局編、1989、『労働力調査年報 昭和63年』総理府編、1996、『女性の現状と施策（平成7年版）』大蔵省印刷局
- 武田京子、1972、「主婦こそ解放された人間像」『婦人公論』1972年4月号（再録：上野千鶴子編、1982b、『主婦論争を読むII全記録』勁草書房、134-149）
- 特別展「ウメサオタダオ展」実行委員会編、2011、『梅棹忠夫—知的先覚者の軌跡』財団法人千里文化財団
- 上野千鶴子、1982、「主婦の戦後史」『主婦論争を読むI全記録』勁草書房
- 上野千鶴子、2011、「梅棹論から半世紀をへて」『KAWADE 夢ムック 文藝別冊 梅棹忠夫 地球時代の知の巨人』河出書房新社、156-161
- 上野千鶴子編、1982a、『主婦論争を読むI全記録』勁草書房
- 上野千鶴子編、1982b、『主婦論争を読むII全記録』勁草書房
- 梅棹忠夫、1959a、「妻無用論」『婦人公論』1959年6月号（再録：上野千鶴子編、1982a、『主婦論争を読むI全記録』勁草書房、191-206）
- 梅棹忠夫、1959b、「母という名の切り札」『婦人公論』1959年9月号（再録：上野千鶴子編、1982a、『主婦論争を読むI全記録』勁草書房、207-220）